

短作文教育の意義

山 本 博 子

要 旨

本稿は、実際に学生が書いた作文を示しながら、200字作文教育が、学生の情報選択能力を育成し、さらには、レポートや卒業論文等の長い文章の指導を行う際に有効であると主張するものである。具体的には、まず、学生による本の推薦文とアンケートに対する回答から、200字作文が情報を選択したうえで文章を書く能力を養うものであることを示す。次に、学生の200字作文と400字作文を比較することにより、一文が長くなる等の400字作文に見られる問題点が、その学生の200字作文にも兆候として表れることを指摘する。そして、学生に学術的な文章の指導を行う前に200字作文を複数回書かせ各学生の持つ文章の書き方の問題点を見出すことによって、効率よく指導を展開していくことができると提案する。

I はじめに

東洋学園大学グローバル・コミュニケーション学部では、2017年度入学生より卒業論文を書くことが必修となった。このカリキュラム改定と連動し、2017年度入学生より2年次半期必修科目として「日本語表現法」が設置された。

4年次に卒業論文を書く学生には、これらの授業において、早くから長く論理的な文章を書く練習をさせなければいけないと考えがちであろう。確かに、長い文章を書くことに早めに慣れさせようという教育が間違っているとは言えない。しかし、接続詞が上手に使えない、一文の長さの調節ができない等の書くことに対して未熟な学生⁽¹⁾に長い文章を書かせることは、指導する教員にとっては多大な労力を要する。また、学生にとっても大きな負担となり、書くことに対する抵抗感を抱く要因となりうる。

そこで、本稿では、短作文教育が、学生の情報選択能力を鍛え、さらには、卒業論文等の長い文章の指導を行う際にも有効であることを示したい。

そのために、まず、短作文教育についての先行研究を紹介する。次に、本学グローバル・コミュニケーション学部2017年度前期2年次選択科目「日本語表現法」における「書く」活動の概要を示す。そして、学生の作文を示しながら短作文教育の効果と課題について述べる。

II 先行研究

200字作文つまり短い作文を書かせることの教育効果とは、どのような点にあるのだろうか。

以下、本稿執筆者の授業実践に影響をもたらした金子泰子・崎濱秀行の先行研究を紹介しながら、短作文教育の意義を確認していきたい。

1 短作文教育の効果

金子（1988）は、「長く書くこと、難しいことばを使って書くことが上手な文章につながるのだと錯覚していないだろうか。」という問題提議をしたうえで、「買い物メモ」や「仕事上の報告文」などは「短く、わかりやすが一番」であることから、気楽に書くことに向き合わせ、書くことへの抵抗感を軽減するために200字作文指導を行なっている。そして、一文を短く書くこと、的確な語句を選択することを意識させながら、半年間毎週200字作文を書かせることによって、どの学生も伸び伸びと自分を表現できるようになり、無駄な言葉もなくなったと述べている。また、金子（1988）は、「毎週提出される受講生数分の作品も、原稿用紙半枚ならば、どうにか処理が可能である。」とし、短作文教育は、教員側にとっても大きな負担がなく指導に取り組めるという利点があることを指摘している。

崎濱（2013）は、「今日の情報化社会においては、短い時間で沢山の情報の処理を要求される場合が多いことから、文章を書く際にも、伝えたい内容を手短かに、かつコンパクトにまとめることが必要である。」という目的意識のもと、「文章産出場面において字数制限を課し、産出字数を短く制限することが、必要な内容を取捨選択すること、内容のつながりを検討すること、内容をコンパクトにまとめること、といった内容情報吟味に対して有益であるか」を検討している。具体的には、被験者（大学生・大学院生）を字数無制限群・400字群・200字群に割り当て、モーリタニア国の資料を読ませたうえで、その国を知らない仲間に向けて紹介する文を書かせるという実験を行っている。その結果、200字群が重要な情報を使用した割合が400字群に比べて高くなったこと等を明らかにし、書き手に対して行った外的操作は「『字数制限』一点だけ」だったにも関わらず、書き手自らが必要な情報を絞り込んだり、情報を効率よく使ったりという活動を行ったことがわかったと述べている。そして、字数制限は「書き手の情報選択、およびそれらの効率的な使用を促す手段の一つとして有効である」と結論付けている。

先の金子（1988）も、「最後のマス目に句点の『。』がくるように」という「ゲーム感覚」の制約を与えたことによって、「書き手は、何度も何度も書き直すはめになるが、その結果として、容赦なく無駄が省かれ、引き締まった結び文が出来ることになる。」としている。

以上の先行研究から、短作文が、伝えたい情報を制限してしまうものではなく、むしろ、効率よくわかりやすく情報を提示させる効果があるものだということが確認できる。

2 長作文教育への移行

1では、200字作文教育の効果についての先行研究を紹介したが、レポートや卒業論文を書けるようになることを目標とする場合は、短作文を書かせることのみで終わらせるのではなく、段階を踏んでまとまった長い文章を書けるように指導を展開していく必要がある。

本節では、金子（2003）における短作文を生かした段階的な長作文への発展指導を紹介したい。

金子(2003)は、「すでに書き慣れた一段落作文(二百字字数制限作文)を活用して、まず段落を二つ(二百字作文を二つ)書き、それを対比させるところからテーマを明確にし、その上で三段落、四段落へとふくらませて、最終的に八百字程度の小論文を書き上げる方法」で、小論文の指導を行っている。具体的には、二段落作文(四百字作文)を3回書かせ、学生自身に、3つの作文のなかから八百字に展開しようと思うものを1つ選ばせ、副題、主題文、アウトラインを作成して、八百字の小論文に書き上げさせている。そして、受講学生41名が書いた作文と、「二段階(四百字)から八百字に展開する今回の小論文の指導法についてどう思いましたか。」というアンケートに対する受講学生の回答をもとに、活動の成果が見られたことを明らかにしている。

このような段階的で丁寧な指導を行うことにより成果が出るという事実は、たいへん説得力がある。しかし、金子(2003)に「指導者は、各段階での指導目標を明確にすると同時に、常に次の段階、さらには全体を見通した指導を心がけなければならない。」とあるように、指導者は各段階において学生個々の作文の問題点を的確に見出し、次の段階につなげていかなければいけない。つまり、経験に基づいた適切な判断力や指導力があること、作文の添削や指導に相当な時間を費やすことが可能であること等、指導者自身に適性や条件等が求められる指導方法であるとは言えよう。

本章では、以上の先行研究を参考にしながら本稿執筆者が試みた「書く」活動の概要を示す。

Ⅲ 活動概要

当該授業は本学グローバル・コミュニケーション学部の表現伝達科目における2年次選択科目として設けられており、履修学生は約30名であった。英語のようにクラス分けテストを行って編成される授業ではないため、履修学生の語彙力・漢字力等の日本語の知識や話す力・書く力等の日本語運用能力は一律ではなかった。さらに、筆者は、1年次必修科目である「教養基礎演習」を担当していることから、本学には400字の作文を書き上げることに苦勞する学生がいることを認識していた。そのため、本授業⁽²⁾においては、まず、何らかの活動を伴いながら負担の少ない200字作文を書かせることによって、文章を書くことに対する抵抗感を減らしたいと考えた。具体的には、2017年6月14日の授業において、図書館での活動を実施し、授業時間内に図書館の本のなかから気になる本を1冊選び、内容をすべて理解できていなくてもよいという条件のもと、その本について200字の推薦文を書かせた。そして、次の週に、名前を伏せたうえで全員の推薦文を公表し、短く効果的な文章とはどのようなものかを考えさせた。

さらに、2017年6月28日には、30分の情報番組⁽³⁾を見せた後に、その内容について、「①印象に残った点を2点以上指摘しなさい。」「②なぜ印象に残ったのかも合わせて述べなさい。」「③最後に『仕事』『働くこと』についての、自分なりの考えを書きなさい。」という指示を与えたうえで、2週間前の作文の倍の量に当たる400字の感想文を書かせた。次の週には、名前を伏せたうえで比較的自分の意見が明確に書けている3名の作文を公表し、それらの作文の良い点や問題点を皆で考えさせた。

IV 200字作文の教育効果

本章では、学生が書いた200字作文を紹介し、短作文教育を行う意義について考察したい。

本活動では、「書く」ことについての抵抗感を持たせないために、事前に本の推薦文の形式や文体についてあまり細かい指示は与えなかった。しかし、学生達の推薦文からは、自分が選んだ本を多くの人に読んでもらうための工夫が見られた。以下に、学生の推薦文2例を示す。

[例1]

この本は、日本人なら誰もが知っているおとぎ話や古い時代に書かれた物語が記されています。英語で書かれていますが、それも一つの魅力だと思います。日本に興味を持っている外国人の方々がこの本を読むと、日本文学の一面を見ることが出来ます。そして、この本を日本人が読むと、外国人の作者がどのように日本について書き記したかを知り、日本文学について新たな発見が出来ます。英語の勉強にも役立ちます。

(A. B. Mitford 著『TALES OF OLD JAPAN』の推薦文)

上の例は、推薦する本がどのような人にとってどのような面白さがある本なのかを分析しながらまとめられている。また、あえて英文で書かれている本を推薦した理由もわかる内容になっている。

[例2]

なぜディズニーリゾートはテーマパークではなく、ホスピタリティ（おもてなし）を提供する夢の国なのでしょう。皆さんの中にもキャストとしてディズニーで働いてみたいと思う人が少なくないかもしれません。あるいは皆さんの中に、キャストの経験がある人もいるかもしれません。この小説はフィクションではありますが、実際のディズニーランドの夢の国とは180度異なるディズニーの裏側がわかった気になれる本です。

(松岡圭祐著『ミッキーマウスの憂鬱』の推薦文)

この推薦文は、ディズニーリゾートという日本人の若者にはたいへん親しみのある場所について問うことから始まり、キャストの経験の有無について読み手を意識した語りかけをしたうえで、本の内容を短く紹介するという展開になっている。

本活動では、200字より長い量の推薦文を書かせていないため、現時点で断言することはできないものの、[例1][例2]のような推薦文が見られたことから、先に挙げた崎濱(2013)の、字数制限は「書き手の情報選択、およびそれらの効率的な使用を促す手段の一つとして有効である」という結論と合致する傾向が見られたということではできただろう。

さらに、クラスメイトの推薦文を読んだ後に行った学生へのアンケートにおける「今回の活動を通して、短く効果的な文章とはどのような特徴があると思われましたか。」という質問に対する回答を見て

も、短作文教育の効果を確認することができた。まず、内容については、「最初にキャッチコピーのような勢いのある一言が存在する。」「どのような人を対象にするかが絞られている。」「書き手の感想と内容がうまく書かれている。」等のコメントが見られた。書く過程については、「自分が言いたいことを短くまとめなければいけないので、文章力がためされ、とても深く考えなければならない。」というコメントが見られた。このような気づきは、今後就職活動等で、自分の長所やゼミでの研究テーマを短くまとめて記さなければいけない際などにも役立つと考えられる。

V 200字作文指導から長作文指導への展開

学生一人一人の200字作文と400字作文を比較したところ、一文が極端に長くなる等の400字作文に見られる問題点が、その学生の200字作文にも兆候として表れていることがわかった。

そこで、本章では、学生が書いた200字作文と400字作文を示しながら、レポートや卒業論文等長い文章の指導を行う前に200字作文を書かせ、各学生の持つ文章の書き方の問題点を見出すことによって、より効果的に無駄のない長作文指導へ展開していくことができると主張していきたい。

1 一文における文字数が多い学生の傾向

ここでは、400字作文において一文の文字数が多くなった学生の作文2例を、それぞれの学生の200字作文の例と併せて示す。

[例3①]は、400字のうち後半の204文字を一文で書いてしまっている作文の、後半の204文字全文である(前半の200字弱は3文に分けて書かれている)。金子(1988)に、「一文は四十五字以内、原稿用紙二行程度にするのが無難であろう。」とあるように、一文の適切な文字数を50字程度と考えると、4文程度に分けて書かなければいけない文を1文で書いてしまったことになる。

[例3①]

どうしても人の手が必要な仕事は、現代にも多くありますし、そのなかで、例えば接客とかでも、メニューをとる際に「iPad」等を活かして注文をとれば、厨房の人が手早く作業が進めていけるし、その際に今までメニューをとっていた側は、どうするんだと上がる(ママ)と思うのですが、その時に「ガラス窓」をふいたりする作業や「食器を戻す」等、機械より早くできる作業があると思うので、活かしていき、活かされる社会になればよいと思います。

(NHK クローズアップ現代「“仕事がない世界”がやってくる！」の感想文)

一方、[例3①]を書いた学生の200字作文[例3②]を見てみると、さすがに200字の原稿用紙を1文で埋めるということはしておらず、3文で構成している。一文平均65字程度で書いたことになり、一見したところ、[例3①]で確認されたような問題がないように見える。

[例3②](下線は本稿執筆者が付したものである。以下の例もすべて同様である。)

秘書検定3級という秘書検定の初歩的なところを学びたいという方におすすめしたい。この本のなかには、秘書検定がどのような目的で行われているのかということが書かれているとともに、この級で問われている5つの領域が書かれています。もちろんこの本の題名通りに3級の問題があり、その要点が整理されているページと回答と解説が書かれているページがあり、わかりやすくまとめられているので、おすすめしたい1冊です。

(実務技能検定協会編『秘書検定試験3級 実問題集』の推薦文)

しかし、文章を読んでみると、2文目は、1文ずつに分けてもよい文を「とともに」でつなげ、3文目も、分けてもよい文を「あり」「あり」と連用中止形でつなげており、この学生が、文を区切り、「さらに」「また」「そのため」等の接続詞を使って文章を展開していくことができていることがわかる。つまり、1つの作文を1文でまとめるのは不自然であろうという認識が働いたために、ところどころで文を区切ってはいるものの、頭に浮かんだことをつらつらとつなげて書いてしまう傾向は、200字作文においても確認できるのである。

次の文も、[例3①]ほどの長文ではないが、2文程度に区切ったほうがわかりやすい文を、一文で書き連ねてしまっている例である⁽⁴⁾。

[例4①]

理由としては、爆発的な変化が起きているのはなんとなくわかるかもしれないが、「仕事がなくなるのがあたり前」という言葉に単純に惹き付けられたということと、ベーシックインカムといったような、人間が何か活動をして報酬をもらうのではなく、一方的にお金を得られるというのが新しい発想だと感じたからである。

(NHK クローズアップ現代「仕事がない世界」がやってくる!」の感想文)

[例4①]は、前の文で情報番組の内容で印象に残った点を指摘したうえで、その理由を述べている部分である。「ということと」で2文に分けてもよい部分を1文でつなげ、「爆発的な変化が起きているのはなんとなくわかるかもしれないが」と補足的な内容を入れていることから、文章が146文字と長くなってしまっている。(この前の文は74文字、後の文の180字は2文に分けて書かれている。)⁽⁵⁾この学生が書いた200字作文を見てみると、やはり区切るべきところで文をつなげてしまう傾向が見て取れる。

[例4②]

「もしあなたの家族や大事な友達が突然変わってしまったとしたらあなたはどうしますか？」この本のはじめに書いてある言葉です。そもそも「うつ」についてしっかりと意味を理解している人は少ないと思いますが、皆さんはどうでしょうか？この本は誰にでも起こり得る「うつ」について易しく説明してあるのと同時に、マンガ形式で読めるのでおすすめです。そして、けっこう

引き込まれます。重く考えずに一度手に取ってみてください。

(細川紹々著『ツレがうつになりまして。』の推薦文)

[例4②]は、200字を6文(引用文を含む)で書いており、一文一文が短く、読み手に語りかけるように本のテーマや雰囲気を伝えている簡潔で良い推薦文と言えよう。しかし、4文目は、「と同時に」の前の「説明してある」が本を主語とした動詞であるのに対し、後ろの「読める」は読み手を主語とした動詞になっており、ねじれた文になってしまっている。したがって、つなげる必要のない文をつなげて、わかりにくい文にしてしまうというこの学生の問題点は、短作文においても見られると言えるのである。

以上、2名の学生の例を挙げることにより、400字以上のまとまった文を書かせる際に一文を長く書く学生は、200字作文においてもその兆候が見られる場合があることを示した。このような学生には、200字を書いている段階において、1文における適切な文字数の目安を伝え、適宜接続詞を入れ、文を切り展開していくことの必要性を指導していくことが求められる。

2 「思う」を多用する学生の傾向

ここでは、400字作文において文末に動詞「思う」を多用した学生の作文2例を、それぞれ同じ学生が書いた200字作文の例と併せて示す。

[例5①]は、400字が7文で書かれており、そのうちの5文の文末表現が「思いました」になっている。以下に400字全文を示す。

[例5①]

私がまず先に印象に残ったものは(ママ)ほとんどの職業でロボットができてしまう世界になるといわれていたことです。秘書は人間がやる仕事だと思っていたのに、ロボットでできてしまったら人間の仕事は減る一方だと思いました。もう一つ気になったのは、タクシードライバーの仕事が減ってきているということです。アメリカにいる友人が一般の人の車で学校に行ったりしていると聞いて、主観的に考えると便利だと思うが、客観的に考えると、タクシーの人はそれを仕事にするために免許を取ったりしているので不平等だと思いました。働きたいと思っている人の仕事が減るのはあまり良いことではないと思いました。しかし、働かない人へ、働いている人と同じ給料というのは不平等だと思いました。しかし私はできることなら働かずにお金は入って来たいので(ママ)、楽してお金を手に入れるのではなく、自分が、自分の代わりに働くロボットを普及させてみるのも面白そうだと思いました。

(NHK クローズアップ現代「仕事がない世界」がやってくる!」の感想文)

この学生は、「①印象に残った点を2点以上指摘しなさい。」「②なぜ印象に残ったのかも合わせて述べなさい。」「③最後に『仕事』『働くこと』についての、自分なりの考えを書きなさい。」という課題

に忠実に従い、①の印象に残った点を指摘する箇所は、「ことです」で終わらせ、それ以外の文はすべて「思いました」で終わらせているのである。つまり、この学生は、自分の考えを書く際の文末表現として、「～と考えます」「～でしょう」などの、「思いました」以外の言葉が使えていないことになる。

[例5①] を書いた学生の200字作文も、やはり400字作文と同様に「思う」が多く使われている。

[例5②]

この本は筆者が長い間に集めたかわいいと思うものや写真などがたくさんつまった一冊になっています。ふとした時に見つけたかわいいと思うものを写真に収めてしまう気持ちがとても表れている本だと思います。そういうものは毎日の中にたくさんあって、通り過ぎてしまうことが多いのですが、これから自分なりに気になるものを見つけていきたくたいと思える本だと思います。この本を読み終わったらほっこりすること間違いなしだと思います。

(銀色夏生著『かわいいものの本』の感想文)

4文中本の内容を示したはじめの1文以外は、すべて「思います」になっている。必ずしも「思います」ではなく、「気になるものを見つけていきたくたいと思える本です。」としたり、「この本を読み終わったらほっこりすること間違いなしでしょう。」としたりしてもよいと思われる文末に、「思います」を用いているのである。このことから、おそらくこの学生は、「思います」以外の、自分の考えを示す際に用いる文末表現を習得しないままにしていることが想像できる。したがって、このような学生には、レポートや卒業論文等の長い文章を書く前に、「思います」を繰り返し使っていることが本人にも即座にわかりやすい短作文において、「思います」以外の文末の終わらせ方があることを習得させる必要があると考えられる⁽⁶⁾。

次の学生の400字作文は、400字を12文で書き、後半の7文の自分の考えを書く部分はすべて動詞「思う」で終わらせている。後半の7文のみを以下に示す。

[例6①]

生活するために働くのは当たり前だと思う。買い物代行サービスがあってもよいけどあまり日本には浸透していないと思う。その仕事は数時間で終わるので、そんなに人数はいらないと思った。働かずにお金をもらえたら人間は何もできなくなると思った。人間がお金を稼ぐ方法を考え直すべきだと思う。施設で働く人は労働時間も少なくして、人を増やすのはよい考えだと思った。スウェーデンの国民投票で成人1人30万円、未成年7万円支給されるのはよいことか悪いことかと言われれば、私は悪いことだと思いました。

(NHK クローズアップ現代「仕事がない世界」がやってくる!」の感想文)

この作文には、最後の1文のみ「思いました」と「です・ます体」で終わらせているという、文体不統一という問題もある。また、「思う」と「思った」が使われているが、あえて現在形と過去形に使

い分けている理由も不明確である。しかし、この学生の200字作文を見ると、[例5]の学生とは異なり、全く「思う」が使われておらず、一見したところ非常に簡潔にまとめられた推薦文に見える。

[例6②]

この本は作者が散歩とおやつをテーマに書いたエッセイだ。例えば、「5月20日水曜日、やよいちゃんが遊びに来たので、一緒に近くのオーガニックなパン屋でサンドイッチを食べる。オーガニックコーヒーも2杯飲んだ。」とある。手書きの4コマ漫画や絵が描いてあり、その絵がとてもシュールで和める本である。途中カラーのページも数枚あり、新鮮だ。字数は少なめだが、そのぶんその日の出来事が想像できるのでとても読みやすい。

(銀色夏生著『散歩とおやつ つれづれノート⑧』の推薦文)

しかし、よく読むと、先に示した[例1][例2][例4②]の推薦文のように、読み手を意識しながら展開させていく文章ではなく、内容や挿絵等その本の特徴について短文で羅列しているのみの箇条書きに近い文章だということがわかる。つまり、400字作文で「思う」を多用したのは、情報番組を見た感想を書くという課題であったためだからであり、接続詞を使わず、気づいたことを短文で書き連ねていくという書き方は、400字作文においても200字作文においても共通に見られるこの学生の問題点だと言えるのである。[例6②]を見ただけで、この学生のそのような問題点を見出すことは難しいだろう。しかし、繰り返し200字作文を書かせ、本の紹介だけではなく、自分の考えを書かせるテーマ等を与えることにより、この学生の問題点が明確になっていくことが想像できる。そのうえで、接続詞を用いるなどして、一文一文の関係性を明確にしながら文を展開していく指導をしていくことが求められていると言えよう。

VI おわりに

以上、本稿では、実際の学生の作文を示しながら、まず、200字という短い作文を書かせることによって、情報を選択したうえで文章を書く能力が鍛えられるという可能性を示した。さらに、400字作文における問題点あるいはその問題点を生み出す要因が、その学生の200字作文においても見出せることを指摘した。そして、学生にとっても作文を添削する教員にとっても負担の少ない200字作文の段階において、それぞれの学生の作文の問題点を解消させようとして、レポートや卒業論文等の長い文章への指導に移行していくことの必要性について述べた。

最後に、今後の課題を挙げたい。

本授業では、200字作文を一度のみしか書かせていないが、学生一人一人の作文の問題点をより詳細に見出し、また本稿での主張が妥当であるかを検証していくために、繰り返し200字作文を書かせる活動を行いたいと考えている。また、その際には、本を勧める文だけでなく、意見を明確にする文や、自分が経験した出来事を説明させる文等、様々なテーマで書かせることにより、各学生の作文の良い点及び問題点を多角的に見ていきたいと考えている。

さらに、短作文指導は、留学生の日本語作文指導にも有効であると思われる。中国語母語話者は助詞の脱落や漢語の多用等の問題点が認められることが多い等、留学生は母語によって作文の問題点が異なる。そのような個々の問題点を短作文の段階で認識させたいので、長作文指導へ発展させていくことにより、より効率よく日本語指導を行っていくことができるだろう。

以上の課題に取り組みながら、短作文教育について、さらなる検討を進めていきたい。

注

- (1) 馬場真知子・田中佳子・林部英雄・有賀幸則・小野博(2003)に、「大学生であるにもかかわらず高校程度の内容の復習から学習を始めざるを得ないという状況がある。さらに今後も日本社会の少子化や、それに伴う入学選抜試験の多様化等により大学生のリメディアル教育が必要となってくることが考えられる。」という指摘があること等から、大学生の「書けない」という現状は、特定の大学のみの問題ではないことがわかる。
- (2) 本授業では、毎週『日本語検定 公式2級 過去問題集』(日本語検定委員会編/東京書籍)の問題を解き、日本語の敬語・語彙・文法・漢字等の知識を身に付けることを目標にしていた。そのような学習と並行して、他者紹介やグループディスカッションなどの「話す」活動と、本稿で紹介する「書く」活動を行っていた。
- (3) NHK 2016年3月15日 クローズアップ現代「“仕事がない世界”がやってくる！」
- (4) 本活動において200字作文を書かせる際も400字作文を書かせる際も、文末表現について指定しなかったために、「だ・である体」と「です・ます体」を書く学生とに分かれてしまった。今後は、事前にどちらの文体を使うかを指定し、なぜそちらを使うべきなのかを指導していきたい。
- (5) [例4①]については、この作文を書いた翌週の授業において名前を伏せたいのでクラスメイトに公開し、長くなってしまっている文をどのように直せばわかりやすくなるかを皆で考えさせた。
- (6) 山本裕子(2013)でも、文末に同じ表現を多用する学生に対して「同じ文末表現の繰り返しを避けるように指導するだけでなく、代替表現を提案させるとよいだろう」とし、「さらに学生が出した代替案が妥当であるかどうか検討させる過程を経るなど、手本を提示するだけでなく、文末表現に主体的な意識を向けさせるような働きかけも効果的であろう。」と提案されている。

主要参考文献

- 井形元彦・岡花瞳(2016)「初年次教育の実施と評価—高知工科大学附属情報図書館、高知新聞社との連携を生かした新たな形をめざして—」(『高知工科大学紀要』第13巻1号)
- 金子泰子(1988)「短期大学での文章表現指導：短作文(二百字字数制限作文)指導の研究」(『上田女子短期大学紀要』第11号)
- 金子泰子(1999)「小論文の指導その1—学習者の実態調査をもとに指導上の問題点を探る—」(『上田女子短期大学紀要』第22号)
- 金子泰子(2001)「小論文の指導その2—アンケート分析をもとに指導上の問題点を探る—」(『上田女子短期大学紀要』第24号)
- 金子泰子(2003)「小論文の指導その3—二段落からの展開—」(『信州大学留学生センター紀要』第4号)
- 境希里子(1998)「日本人学生の、文章力における問題点(1) — 一文単位でのわかりやすさについて考える —」(『文化圏大学紀要 人文・社会科学研究』第6集)
- 崎濱秀行(2013)『文章産出スキル育成の心理学』ナカニシヤ出版

-
- 橋本信子（2016）「授業と図書館の協働—初年次教育科目における連携を中心に—」（『流通科学大学論集—人間・社会・自然編—』第28巻2号）
- 馬場眞知子・田中佳子・林部英雄・有賀幸則・小野博（2003）「日本語リメディアル教育 日本語文章能力開発演習の試行と成果の検証」（『メディア教育研究』第11号）
- 山本裕子（2013）「日本人大学生の「書く力」の発達に関する縦断的研究（小論文に見られる特徴から）」（『リメディアル教育研究』第8巻1号）
- 山本博子（2016）「大学生の日本語力についての一考察—英語力と日本語力の相関関係を測る予備調査より—」（千葉大学国際教育センター『国際教育』第9号）

